

第32回世界医学検査学会国際学生フォーラムに 実務委員として参加して

岡田 光 貴*

平成28年8月31日～9月4日にかけて、第32回世界医学検査学会が神戸国際会議場及び神戸国際展示場で開催されました。筆者はこの度、本会内の学生参加企画である「国際学生フォーラム」に実務委員として参加しました。本フォーラムの進行に携わり、参加学生達の努力を身近で見守ってきた者として、ここにその内容を報告したいと思います。

まずは開催に先立ち、本フォーラムの日本代表学生の選抜が行われました。代表を希望する学生達は日本語及び英語抄録の提出が求められました。これら書類を元に厳正な選考が行われ、最終的に

は8人の代表者が決定しました。その内訳は、大学院生2名、大学学部生3名、専門・短期大学生3名でした。その後、学生達は、本番で発表予定のプレゼンテーションスライドを作成し、お互いに連絡を取り合って練習を重ね、やがて本番を迎えました。

国際学生フォーラム5日間の日程の内、実際の発表機会は初日、3日目の国際学生セミナーにおける発表、そして最終日の計3回でした。まずは初日、海外からは韓国2名、台湾2名、スウェーデン1名、ノルウェー2名、デンマーク2名の5ヶ国9名が集い(写真1)、各国の臨床検査事情に関



写真1 参加学生の様子

*天理医療大学医療学部臨床検査学科 okada@tenriyorozu-u.ac.jp

する発表が行われました。国ごとに異なる検査教育カリキュラムや資格試験、臨床検査技師の仕事に関する内容には多くの聴講者が集まり、皆興味深く聞き入っていました。一方で、8名の日本代表学生は大学院生、大学学部生、専門・短期大学生と3つのチームに分かれ、それぞれが発表を行いました。いずれも入念に準備を行った成果が実り、海外学生に劣らず、非常に高いクオリティの発表を披露することが出来ました(写真2)。

次に国際学生セミナーにおける発表準備が行われました。本セミナーは、海外の学生から日本の学生に向けて、自国の臨床検査学校の様子や学生からみた自国の紹介、医療や就職状況等を紹介する企画でした。そして、本セミナーでは海外学生と日本人学生がチームを組み、海外学生の発表後、日本人学生がその通訳を行うという特徴がありました。したがって、学生達は英語で意思疎通を行い、協働してスライドを完成させることが求められていました(写真3)。これには苦勞している様子も窺えましたが、皆何とかやり遂げることが出来ました。本セミナーは最終的に聴講者が学生及び学会参加者合わせて1,000人を超えました。一方で、このような大舞台にも学生達は臆することなく堂々と発表を披露しました(写真4)。発表に向けたディスカッションを、苦勞しながらも必死で頑張ったことによって、彼らは大きく成長したように思います。

また、学会4日目には自由時間が設けられました。そこで、学生達は大阪観光に行きました。日本人学生が海外の学生に大阪の食べ物や文化などを紹介し、共に楽しみながら観光することで、国境を越え親睦を深めておりました。

そして最終発表はGADと呼ばれる、各国の参加者が集う会議内で行われました(写真5)。その内容は「臨床検査の今後の展望」、及び「臨床検査の国際交流について」、でした。これには日本学生を含む4人の代表学生が発表を行いました。発表後は喝采を浴びるほどの盛り上がりとなり、5日間に渡る国際学生フォーラムの成功を確かに感じさせるものでありました。

国際学生フォーラムを通じて、筆者は学生の非



写真2 初日発表の様子



写真3 ディスカッションの様子



写真4 国際学生セミナーの様子



写真5 最終発表の様子

常に大きな成長を実感することが出来ました。特に、フォーラム初めの頃は海外学生の話す英語が上手く聞き取れず、意思疎通が出来ていなかった日本人学生が、日を重ねて徐々にディスカッションに参加していく様には驚かされました。さらに、日本での観光を終えて学生同士が談笑をする様子は、とてもここ数日の付き合いとは思えないほどの絆を感じさせるものでした。国内外の学生同士が臨床検査の現状や将来について様々な意見を交わしたこの度の経験は、これから臨床検査技師を目指す彼らにとって、非常に大きな財産になったと思います。また、本フォーラムにおいて海外の検査事情を知ることで、学生達は自国における臨

床検査の優れている点や課題についてより理解が深まったことと思います。

国際学生フォーラムに関してその概要を述べて参りましたが、本フォーラムのように臨床検査を学ぶ学生同士の国境を越えた取り組みは日本の検査技術のグローバル化を促進する一助になると思いますので、今後もぜひこのような試みが継続されて欲しいと切に願っております。また、今後、臨床検査の未来を担う学生達には、本フォーラムで学んだことを活かし、日本ならびに世界の臨床検査技術の発展に寄与出来るように努力を継続して欲しいと思います。